

みんな夢見る

並木せつ子

寝ているときに見る夢は、レム睡眠と呼ばれる時間帯に見ているものだという。この時間帯には誰でも夢を見ていて、夢を見ないという人は覚えていないだけだそう。私はよく覚えているほうで、若い頃から今に至るまで、毎晩よく夢を見てきた。

まだ図書館職員となって間もない頃、“長くつしたのピッピ”と“ひとまねこざる”が夢に出てきたことがある。定番といわれる児童書を必死で読んでいた頃だったからかもしれない。同僚に話したら「そんな楽しい夢を見られていいね」と羨ましがられたが、夢は多かれ少なかれ自分の心の中を映すものだから、登場人物がピッピであれじょーじであれ、明るい楽しい気分の夢でなかったのは確かだ。子どもの本の世界では、夢の中で冒険が繰り広げられる楽しい物語もあるが、現実の夢ではなかなかそうはいかない。少なくとも私の夢はいつもどんよりしていた。

現実世界でできないことをやってしまう—やろうとする、という夢は見たことがある。ピアノを弾いたり(人前で!)、バレエを踊ったり(舞台上!)、車を運転したり(免許を持っていないのに!)。だが夢の中でも自分ができないことをちゃんと認識しているので、何となく不安なのだ。これまた楽しくない。そもそも、ほとんど自分の生活(仕事)に密着した夢ばかりだった。何の準備もしていないのにおはなし会の時間が迫っているというような……。

図書館を離れて10年たった今もそれを引きずっているのか、仕事もうまくいかなくて困ったり、期限がくるのに間に合わなくて焦ったりという夢を見る。どうも職員のままでい

るらしい。おまけに、走ろうとして走れない、叫ぼうとして声が出ない、電話をかけようとしてかけられない、何かに怯えてドキドキする、という不安や恐怖感をはらんだ夢も多く、せっかくの夢見る時間があまり安らかな時間になっていないのは残念である。

絵本でも怖い夢を見る話が多い。オオカミが出てくる夢を見たトト(『こねずみトトのこわいゆめ』)と、かいぶつが出てくる夢を見たリサ(『リサのこわいゆめ』)は、怖いものの真の姿を知ることによってそれを克服した。手っ取り早いのはペネロペのように、怖い夢を見なくなる魔法の粉を顔につけることかもしれない(『ペネロペこわいゆめをやっつける』)。

かつて私の夢に出てきたじょーじは体が大きくなる夢を見た(『おさるのジョージゆめをみる』)。体が小さいと、できないことがたくさんあるからだ。でも大きくなったら不都合が多かった。夢からさめてやっぱり今のままがいいと思いなおす。絵本はほっとして目覚めるところがいい。

さて、サルやネズミのトトは夢を見たが、人間以外の動物も夢を見るのだろうか。哺乳類にはレム睡眠のあることが確認されていて、夢を見ている可能性はあるらしい。魚や鳥や昆虫など他の動物については今のところわかっていないという(『夢ってなんだろう』)。絵本の世界でも夢を見るのはまずヒト、そしてネコ(『ニニのゆめのたび』)、トラ(『とらのゆめ』)、ウサギ(『リッキのゆめ』)など哺乳類が多い。

ただし『ゆめみるどうぶつたち』の中では、ツバメもアリも、カエルもタコも、カタツムリもタツノオトシゴも、いろいろな動物が夢を見る。どの動物もゆったりと満ち足りた顔で眠っている。みんながこんなふうに優しい顔で夢を見られるように、ペネロペのお父さんにはぜひ魔法の粉を分けてもらいたいものである。

(なみき せつこ)

マリオ・ラモの魅力

～絵本の世界が伝えるもの～

原 小枝

晩年、絵本作家マリオ・ラモに特化して翻訳の仕事をしていた母（原光枝）によって、私は彼の作品を知った。日本で人気の『ねんねだよ、ちびかいじゅう！』は、軽やかなタッチのイラストにキャラクターの心が巧みに現れていて、見事！ 眺めているだけで笑いを誘われる。しかし、その雰囲気呑まれて終りではない。「エッ！」と言わせる最後のオチに、ラモのウィットが鋭く光るのだ。私のお気に入りには『ロメオとジュリエット』。シンプルなイラストに鮮やかな色遣いが、純朴で力強い印象を与える。思いも寄らないストーリー展開はホロリとさせ、温かみのあるユーモアが心に沁みる。

こうして大人になって改めて絵本の魅力に引き込まれたが、翻訳の仕事までは考えていなかった。しかし母が亡くなった2017年、父（原章二）から誘われた“母との思い出の地を巡る…”という趣旨のフランス旅行できっかけが訪れた。パリの書店で母の未訳のマリオ・ラモの2冊の絵本に遭遇したのだ。

■『こわがりのちびかいじゅう』

表紙全面を覆う不気味な“紫”。濃い“緑”の小山に見開かれた、ハッとさせる“黄”信号のような真ん丸の二つの目玉。何とも不穏な色彩だ。この怪獣は一体何を恐れているの？ ページを繰ると、黄緑色のカエルみtainな男の子が明るい衣装に身を包み、キョトンとした表情で突っ立っていた。主人公のポロション君は、二頭身の下膨れ。丸々とした童顔の怪獣で、ママが大好き。夜の暗闇は大っ嫌い。小さな自分が自分について語りたくて仕方がないであろう内容が自己紹介となり、物語は始まる。子ども目線で綴られた光あふれる大好きな日常の場面は、

眺めているだけで、とにかく平和な気持ちになってくる。

しかし真紫の夜のページで、一変する。現実のちょっとしたことで得意げにもなれば、“非現実だ”と大人が笑うようなお話の展開を素晴らしい想像力で生きてしまうのも、また子ども。“紫”に染まった大嫌いな夜のページと、白昼夢のように幸せいっぱい“白”のページ。ママと居られる大好きな時間を彩る、何て素敵なパステルカラー！ そんなインパクトあるコントラストに、気持ちが乗せられていく。

ところで、怪獣って“怖い”だけの存在？ 一方的に見つめがちな私たちに、ラモは怪獣の正体を、ユーモアを交えて考えさせる。「正体不明の怪物」を“怪獣”だとする私たちだが、怪獣にとっては私たち人間こそ「正体不明」。それは“暗闇”同然。私たち一人一人の中にも「怪獣」は居るし、一人一人がまた誰かにとっての「怪獣」なのだ。現実の世界に「正体不明なもの」はいくらでもある。それらに向き合うことは大人にとっても大切な仕事ではないか。文明社会は、そうする中で発展してきた。他方、科学技術を駆使して“暗闇”の正体を暴き、闇雲に発展する中で失ってきたものも多い。“暗闇”を無闇に恐れたり、自由に想像力を働かせることのできる曖昧なものを全て暴こうとせず、「正体不明なもの」とも時には共存できることが望ましいのではないか。

白日を迎える前には「正体不明なもの」と接しつつ、明日を生きるエネルギーを補充しなければならない。「正体不明」の“暗闇”と一時的に対峙する時、子どもはそこに「怪獣」を映し出すこともある。それをないがしろにせず、夢の世界に温かく送り出すことは、子ども

を見守る万国の大人が為しうる、とても素敵な仕事ではないか。子どもの大事な時間を優しく応援できる大人は、自らの抱える諸問題にも上手に向き合えるように思う。

怪獣はどこにでも居る。でも彼らには愛嬌もあるのだ。「怪獣」と共存する道を自ら切り開くポロシオン君こそ、温かく見守ろうではないか。

ラモはそんなメッセージも伝えなかったのでは？ 翻訳を通して、そんな思いが湧いた。

■『わたしのふうせん』

木の間に漂う真っ赤な風船…「わたしのふうせん」。平凡ながら、表紙のとらえどころのない明るさに、どこか好奇心を刺激された。主人公は？ 左上から、小さな赤い鳥が笑みを湛えたような目で、その「わたし」をそっと見下ろしている。何と「わたし」は赤い風船を手にした“赤ずきん”ちゃん。真っ赤な風船は森の中でよく目立ち、自由に気ままな赤ずきんちゃん同然、気高く楽しげに浮遊し、彼女にお供する。目の端に風船の赤を捉えていると、自然と明るい安心感に自信も芽生えてくる。

赤ずきんちゃんが出会うのはアフリカでおなじみの動物だが、彼らの予期せぬ言動が面白い。キャラクターはそれぞれユーモラスに描かれ、奇想天外なラモの発想がちりばめられている。よく知られた、おばあちゃんに会いに行く道中でオオカミに食べられてしまうお話ではない。無計画で、“王道”というのを何かと避けるような人生を来た私は、思いも寄らぬ展開の愉しさに、親しみと開放感を感じた。

動物たちの申し立てには、毎回それなりの理解を示して応じ、気を取り直しては自分の道を歩み続ける。何とも頼もしい。オオカミを恐れながらも、楽しげに歌って突き進む彼女。感わされず楽しく我が道を行く彼女に、私はすっか



『こわがりのちびかいじゅう』マリオ・ラモ絵・文／原小枝訳／定価本体1500円／上製／B5変型／40頁／2020年5月刊／平凡社



『わたしのふうせん』マリオ・ラモ絵・文／原小枝訳／定価本体1600円／上製／A4変型／48頁／2020年7月刊／平凡社

り魅了されてしまった。何てチャーミングな赤ずきんちゃん！！

こんなに盛り沢山な道中…行く末には一体、何が待つのだろうか？ しかし何事もデーンと受け止める赤ずきんちゃんすら思いもよらなかった展開で、オオカミとの結末は訪れる。彼女を救ったのは、武器になるな

んて考えもしなかった宝物のように、ただひたすら好きなもの。彼女のように人生を歩めたら！ 一人一人の子どもがそれぞれの赤い風船を握りしめ、自分の道を楽しく進んでいけますように。風船をそっと手渡し“きっと大丈夫よ”と、何が出るかわからない森へ子どもを送り出せる大人でありたい…。

私自身は20代までの若い頃、7年間の海外生活に恵まれた。家族で過ごした学童期のフランスでの2年間と、高校3年間の豪州留学と、中米パナマでの青年海外協力隊員としての2年間だ。言葉もそれぞれ違い、一ヶ所の滞在は最長3年と、短い。言語を堪能に操り、現地にどっぷりと浸かって同化したような生活を送る境地にまで至れなかった。しかし若くて不安定な時期、その社会で言語もままならない未熟な自分として生きる中で、異文化と向き合う心意気のようなものを学べたように思う。常識や偏見に囚われない世界観を持つことで心身もより健やかに保て、「ユーモア」が異質な背景同士の者の心を一瞬で引き寄せ合うということ、身を以て知った。

常識や先入観を覆すようなマリオ・ラモの作風に親しみを感じ、彼の絵本に心惹かれたのは必然だった。彼の作品は文化を超えて多くの子ども達の心に響き、彼らの世界観をさらに明るく広げることができるのではないかと、希望を抱いている。(はら さえ)